

何事も、みかけだけで判断してはいけない。確かに、年を取れば脳は萎縮して行く。でも、それだけで、脳の働きが悪くなるわけではない。

82歳のMさん。高血圧の患者さんだ。頭のMRI（磁気共鳴画像装置）の検査をしてみると、脳の萎縮が進んでいることが分かる。ことに、記憶をつかさどる海馬の萎縮が目立つ。10年前の画像と比べてみると、年を取った以上に脳の萎縮が進んでいるのではないか。アルツハイマー型認知症を疑わせる異常なのである。

だが、診察室のやり取りや家での暮らしぶりからは、認知障害があるとは思えない。い。でも、い。つにも気になる。そこで、記憶を中心とした簡単な認知機能テストを試してみる。が、なんと、満点だ。医者は要らぬ心配をさせた患者さんに、何度も謝らなければなるまい。

実は、こういうことは、脳萎縮の起きやすい高齢者で、時々経験することである。論文上でも、剖検やPET/CT（陽電子放出断層撮影）でアルツハイマー型認知症と確定診断された患者さんが、生前や検査前には認知症の症状を示さなかったと

いう症例の報告は少なくないのである。それは、いわゆる「認知予備能」が高いからではないかとされている。

その認知予備能は、脳が何らかの損傷を受けたとき、認知機能を保つために働くものである。予備能の高いものである。予備能の高いほど認知機能低下が抑えられる。だから、認知予備能は、認知症の発症防御因子と考えてよいようだ。でも、残念ながら、それは具体的にはどんなものなのか、いまいち、よく分からないのである。

しかし、これだけは言える。認知予備能は、Mさんもそうだが、好奇心が旺盛で、運動や趣味などを続けているタイプのひとに高いようだ。もっぱらテレビの前でうたた寝をしているようなひとではない。

（石黒修三三三クリニック・脳神経

外科専門医…418北國新聞掲載）